

第十章 アンブレラ作戦

今日、フィリピン政府は、サンタ・ロマーナの存在自体を否定している。「それは伝説なのだよ。」と彼の家族に語っている。

我々は彼の弟や愛人、子供にインタビューしている。彼の墓にも訪れ、そして数百の書類、録音テープ、ビデオ、目撃者の口座、結婚届、そしてCIA高官、マルコス一族のメンバー、サンティーの仲間からの確認、銀行記録、訴訟記録を蓄積してきた。(それらは、彼が六十年以上前から実在し、彼の莫大な現金や金の延べ棒などの富が世界中の銀行に眠っているという明らかな証拠となるのだ。)

サンティーによる金の回収作業はM資金などの多くの秘密資金の財源になっていた。

彼はマルコスが介入するまでアメリカのゴールドデン・リリー回収作戦の窓口だった。マルコスは彼を押しつけ、自分が新しい窓口になった。サンティーの回収が一九四七年(昭二十二)に終わった後、マルコスが同様の作業を始めるまでに二十年の中断があった。一九五〇年代には日本人の小さな団体が色々な言い訳を言いながら金の回収するためこっそりとフィリピンに戻ってきた。ある人達は兵士の死体を捜し、日本で埋葬し直すためだと主張していた。日本は傷ついた国土を復興するため、山を通す様なあまり必要のないルートで道路や灌漑工事などの援助を申し出ていた。日本のサルベージ会社はマニラ湾に沈んでいる船の引き上げ撤去を申し出て、引き上げそして湾岸へ収容した。この作業は引き上げた船から急いで金の延べ棒を船積みする目的のためだ。

日本企業は、フィリピン中で地面に大きな穴を掘らなければならぬような奇妙な地域を選んで工場を建設した。工場が完成すると、フ

ィリピン人はテレビ、カセット、コンピュータ、冷蔵庫、クーラーなどの組み立てラインで働いた。それらはとても頑丈な木枠の箱に入れられ日本へ船積みされた。CIAに情報筋によると、諜報員はこの様な方法で金の延べ棒がフィリピンから密輸されていることを承知していたが、邪魔はしなかつたという。

マルコスが金を発掘したのは偶発的な出来事からだった。マルコスはルソン島北端、保養所のあるイルコス・ノートで、二人の日本人が山を掘っている事を聞いた。彼らは帝国軍人の古参兵だった。自分達のもがそこに隠されていたのだった。マルコスは彼らの金のバー(小さなもの)を没収した。

鋭敏で若かつたマルコスはサンティーの回収の話を知ると彼を積極的に応援した。法律家だったことがマルコスをいろんな面で助けた。徐々にマルコスはサンティーの作戦、いわゆるアンブレラ作戦を乗り取り始めた。一九六五年、マルコスは大統領になるやいなや、日本地下組織の首領、笹川良一に直接近づき、戦時略奪品の回収を共同でしないかと依頼した。児玉の旧友である笹川は、多くの巨大地下貯蔵庫の場所を知っていた。賠償金の大幅削減をするため、マルコスは気前よく大統領令を発することができた。宝探しをするというより、むしろ残り物をあさるといのがマルコスの典型的なやり方だ。彼はずいぶん古くてフィリピン人が食べると死ぬ可能性があるイワシの缶詰の大量輸入を躊躇せずに許可したことすらある。彼は日本のギャングを一儲けさせ、フィリピン人を貧乏にすることで財をなすことなど平気だった。

一九七一年、マルコスが莫大な宝物を乗っ取った事をわずかな人だけが知っていた。しかし今やそれは世界中に知れ渡っていることだ。

その年の一月、フィリピン人の錠前師でアマチュアの財宝ハンター、ロザリオ・ロジャー・ロクサスが日本軍の掘った坑道にもぐりこみ、壮大な純金の仏像を発見した。重さは一トンだった。(現在だと二十五億円だ)着座した高さは二八インチ、明らかにビルマ風で、マンダレイで作られ徴発されたもので、数世紀の富の蓄積を物語っていた。その後ロクサスの身に起きたことがあまりにも奇妙なので、我々はハワイ州最高裁判所でのロジャー・ロクサス&ゴールデン・ブツダ会社対マルコスの裁判記録を大々的に取り上げ、この物語の土台にしようと思う。この裁判には四三〇億ドルの賠償金がからんでおり、民間としては裁判史上最大の賠償訴訟だった。

裁判での実情調査は数千ページの証言やコピー、契約原本、写真、ビデオでの証言などから集められた。マルコス側の弁護士もロクサスの弁護士も即決する気はもうとうなかった。

ロジャー・ロクサスはバグイオ別荘地での商売は芳しいものではなかった。しかし空いた時間に財宝探し協会の代表をしていた。その役職のために日本人訪問客とは何度も接していた。その中の一人、大久保・アウセビオ (Eusebio) がロクサスに、自分は若い頃、山下將軍の通訳をしていたと語った。そして、山下は終戦になる前の一年間に自分の旅団に命じ、マニラからバグイオへ大量の金や銀のバーを運んだと言うのだ。大久保は、バグイオ病院のそばの地下坑にはそれらの金塊を入れた木箱が積み重ねてあり、山下が自分の部屋であり本部として使っていた近くで純金の仏像を見たと言った。スペイン系のアルバート・淵上はロクサスに自分の日本人の父親が財宝マップを残していったと述べた。淵上家は市場に野菜の売り場を出していた。彼が言うには、彼をバグイオ病院裏にある地下坑へ連れて行ったのは

父親で、そこにはトロツコ用の軌道がひかれ、横の地下坑は金の箱でいっぱいだったという。

数年後、アルバートは調査を始めたが何も見つからず、頭にきてマップを燃やしてしまった。妹が地図は鏡に映してみるのだと気づき、彼は大いに怒られた。

ロクサスは、戦時中メディナ・ゲリラ団の団長と共にルソン島で戦ってきたアメリカ人、ジョン・バリンジャーと友人だった。

病院船富士丸がスービック湾で金属ケースを荷降ろしている所を写真に撮ったのはバリンジャーだ。富士丸から降ろされたケースはトラックで山中へ運び、洞窟の中へ収められ封印された。後になり、メディナの連中がバグイオへ潜入したとき、バリンジャーは日本軍兵士が病院近くの地下坑へ重い箱を運んでいるのを目撃した。ゲリラ達は手榴弾と機関銃で攻撃し、洞穴入り口の密閉部を爆破し、敵を中へ閉じ込めてしまった。バリンジャーは引退しニューメキシコで暮らした時、息子のジュネとアマチュアの宝探し好きのための新聞を作っていた。彼らは出来る限り何度もフィリピンを訪れることにしていた。旅行中、ジョン・バリンジャーはロクサスに、ゲリラ達が閉じ込めた地下坑の入り口はコンクリートのトーチカのそばだったと思うと告げた。しかし、彼は場所を特定することはできなかった。なぜなら、長い年月が過ぎていたし、トーチカは台風によって風化してしまっていたからだ。淵上、大久保、バリンジャー等からの報告で、ロクサスは地下坑の存在を確信した。しかし、トーチカを捜すのに多くの時間を必要とした。そこは公共の場所なので、財宝探しの穴を掘るには政府の許可を必要とした。条件は発掘した財宝の三〇%を政府に渡すことだった。

許可はマルコス大統領のおじ、バグイオ裁判所判事であるピオ・マル

コスから与えられた。一九七〇年春、ロクサスと仲間達がトーチカ付近を掘っていると、破壊した地下坑の入り口と思われるものがみつかった。七ヶ月を要してそれを掘り返したのだが、死体からの悪臭で吐き気を催した。中へ入り込む前に、換気のために一週間は必要だった。入り口付近で、軍事無線、銃剣、ライフル、日本軍の軍服を着た遺骸をみつけた。失敗の繰り返しの数週間後、トロツコレールを備えた主坑道にたどりついた。そこには照明用の簡単な配線がされ、本物の地下坑だと確信できた。

片方の先は分枝している。主坑道床の土部分の下に厚さ二十フィートばかりのコンクリート板を発見し、それを叩き割った。一九七一年一月二四日、彼らはそれをぶち破り金の仏像をみつけたのだ。高さは三フィートしかないがとても重く、床まで持ち上げるには鉄製のフレイムにチェーン巻き上げ機を必要とした。ころがしながら外へ引きずり出すには大変な苦労だった。ロクサスはトラックを借り、友人とともに仏像を自宅へ運んだ。奥の寝室の角へ置き、ベッドカバーで覆った。再び探索を開始して、今度は小さな木箱を坑道の床でみつけた。中を覗き込むと、二十四個の小さなビスケット状の金のバーがあった。一インチの幅、二インチの長さ、厚みは0.5インチだった。二四金でこの大きさだと重量は三〇オンスぐらいだろう。一九七一年時点でその価値は千五十ドルだ。(1オンス三十五ドル、当時のドルは三六〇円なので約三六万円)

一箱でざっと二万五千ドルの価値があることになる(約九百万円)その近くでロクサスは、人工的に作られた部屋をみつけた。幅六フィート奥行き三〇フィートの中に数百の木箱が積み重ねてあった。どれも七五kgの金塊がぴったり入るビール箱ぐらいの大きさだった。彼は

中身がなんであるかわかっていたので、箱を開けはしなかった。すでにビスケット状の金塊取引で一財産を作っていたロクサスはいくつかの軍刀や銃剣、美術品と一緒に二十四個の黄金ビスケットを手に入れた。彼は大きい箱はそのまま残しておいた。何日か後、ロクサスは他の誰かが見つけやしないかと心配になり地下坑の口を爆破した。彼にとつて安全に穴掘りを継続し、残りの財宝を回収するには、金の工面が先決であった。七つのビスケットを売り、金の仏像の買い手を探し始めた。それが間違いのもとだった。

噂は瞬く間のうちに広がった。二人の有力な買い手がやってきて、仏像の首近くに穴をあけ分析を開始した。両者ともその仏像は一九四〇年以前のアジア標準純度である二〇〜二二カラットであると結論を下した。一九七一年、エイプリルフルの日に第三の男、ジョー・オイハラが仏像を調べにやってきた。オイハラはロクサスに、自分はマルコス大統領の母の家に住んでいると語った。大統領の母はジョゼファ・エドラソン・マルコスと言い、狡賢く利己的との評判である。

彼は念入りに仏像を調べ、買取りに興味があると言い、数日中に手付けの百万ペソを持って戻ってくると約束した。ロクサスはオイハラが首の部分に特に興味を持っていたことに注目し、彼が帰ったあと弟のダニロと一緒に頭部を回してみることにした。頭部に厚板をあてて、緩めるようにハンマーで動くまでたたいた。中はクッキー入れのような空洞で、三個のダイヤモンドが入っていた。ロクサスはダイヤをとりだし、別々に保管し、頭部をもとのように絞めなおした。

四日後の四月五日午前二時半、機関銃を担いだ八人の軍服の男がロクサスの家のドアをたたいた。国家調査局の犯罪調査情報員と名乗り、令状を持っているので中へ入れると叫んだ。ロクサスはドアを開ける

のを恐がったが、二人の男がガラス窓を破り、機関銃を室内に向け、三分以内にドアを開けるか、死にたいか、決めるように言った。

ドアを開けるとそこにはオイハラもいた。男は捜査令状をロクサスにちらつと見せた。中央銀行規定違反と銃器不法所持」と書いてあるようにみえた。ピオ・マルコス判事の署名がある令状は、仏像とその他に取得した財宝を早急に法廷事務所の監督官のもとへ明け渡すよう命じていた。ロクサスは一人でいたわけではない。弟のダニロは騒ぎまくり銃底で殴られた。ロクサスと家族、ボディガードの二人の友人は、軍人が家を検索する間、床に伏せているように言われた。彼らは仏像、ダイヤ、残っていたビスケット状の金塊、軍刀、コインコレクションそして子供の子豚貯金箱までも持ち去った。又、彼の友人が置いていった二二口径の壊れたライフルも押収していった。このライフルが後日、彼を武器の不法所持で起訴することになる。

彼らは仏像も他の何も裁判事務所へは届けなかった。朝になり、ロクサスは地区の新聞社と警察へ強盗事件として報告した。そしてピオ判事に会いに行き、なぜ捜査令状に署名をしたのかを尋ねた。判事は甥であるマルコス大統領からそうするように命じられたと言った。そして付け加え、警察や報道機関へ言うとは、自分から殺されにいくようなものと言った。

ひるまずロクサスは警察へ引き返し、公式に不服申し立て書へ署名した。彼はマニラ北部カバナツアン市へ行き、地方有力者の助けを求めた。そこで四人のボディガードを紹介され、隠れ家も手配してもらった。その間にバグイオの別の判事は捜査令状の指定どおり、仏像を裁判所の保管所へ返還するように軍部へ命じた。

軍部は、マニラの熟練工が真鍮製の仏像を急いで作り上げるまでの二

週間、返還を延期した。頭の取り外しができず、見た目もまったく似ていない真鍮の仏像がバグイオの裁判所へ納入された。

数日後、ロクサスは大統領の母が送り込んだ二人の諜報員に追い詰められていた。彼らは、ロクサスが真鍮の仏像は自分が見つけた物のひとつだと一般に公表すれば三百万ペソ払うと申し出ている。

四月末、ロクサスはフィリピン裁判所長官直々に発行した身柄保証書を持ち、四人のボディガード、裁判所からの二人の検察官、自分の弁護士、そして多くの報道陣とカメラマンを引き連れてバグイオへ仏像を調べに戻ってきた。裁判所で彼は仏像を調べた。そして勇気を持って（愚かにも）それは自分の見つけたものではないと発表した。

まず、色が違っている、顔の形も違う、頭は取り外せないし検査のためにあけたドリルの穴もないと指摘した。報道陣は無名の一人の男が有名な大統領マルコス派閥に挑戦したことで衝撃をうけた。

誰もが大統領、暗殺団、妻そして母の残酷さを聞いている。反対陣営、自由党のメンバーは選挙でマルコスに打撃を与える良い機会だと沸き立ち、ロクサスに上院の「金の仏像事件」調査会で証言するように説得してきた。

一九七一年五月四日、ロクサスは上院で全面的な供述をした。マルコスは即座に、下品で政略的な目的の攻撃だと非難し、仇はとると宣言した。十四日後、キャバナツアンに戻り隠れていたロクサスは再び追い詰められ逮捕された。逮捕したのはマルコスが送った市民の格好をした三人の諜報員だった。彼らはロクサスにマルコスに会ってもらうと言った。ところが連れて行かれたのは国家警察署で、そこで拷問を受けた。そしてマニラ北部パンパンガのサンフェルナンド警察本部へ連行された。彼らは窓もない監獄の暗闇の中でロクサスに妻と子供の

絵をみせ、もう一度会いたいのなら後援している上院議員のリストを提出し、残っている財宝の隠し場所を白状しろと脅した。

ロクサスはそれを拒否した。彼は全身に電気ショックを与えられタバコを押し付けられた。そしてクラーク基地の近く、エンジェル市のホテルへ移され拷問が再開された。大きなゴム製の木槌で気を失うまで顔や頭を殴られた。彼は右目を失い、見た目は怪獣のようになってしまった。

二週間にわたりホテルに留め置かれ拷問は繰り返された。

一方で兵士は自宅捜査を平和的に行い、武器は持っていなかったとする宣誓供述書に署名するよう言われた。彼らがロクサスを拷問するよう命令されたことなどは、取るに足らない様に見えるが、実際には考えられないほど残酷なものだったのだ。

ある日彼はバグイオの法廷へ戻り、真鍮製の仏像と一緒に写真を撮らされた。その夜、ホテルの窓をこじあげ逃亡し、妹の家で頼りになる人を探した。彼は身に起こったことを上院議員に電話で報告し、再び上院で宣誓証言を求められた。その証言は一九七一年六月三〇日に行われ、拷問を含め、それまでに起こったすべてを報告した。

彼がバグイオの家にもどると、マラカニアン宮殿への召喚状を持った男がやってきた。宮殿で、彼は財務局の職員カエサル・デムムラオに会った。彼が言うのには仏像の為に（三百万値上げして）五百万ペソを支払いたいという事だった。午後には金をもらえらというので宮殿にもどるつもりであったが、ロクサスは生命の危険を感じ、もどることをためらった。七月初め、彼は事情聴取に欠席したために逮捕された。

一九七一年一月二八日以来未決だった武器不法所持の事情聴取で、彼

は出頭拒否罪の短期拘留を命ぜられた。一カ月後、彼は反対派、自由党指導者であり、父親が元フイリピン大統領であった上院議員セルジオ・オスネナから送られた弁護士により保釈された。ロクサスはマニラへ自家用機で飛び、トラックでミランダ広場へ向かった。そこでオスネナは、その夜の政治集会で話をするように求めた。マルコス反対派による集会は大観衆で混み合い、演台の上には有名な反対派の指導者達がならんでいた。数分後、手榴弾が二つ人ごみの中へ投げ込まれた。十名の市民が死亡、オスネナや七人の上院立候補者を含む六十六名が負傷した。我々がマルコス一族から聞いた話によると、手榴弾はマルコスの指令で、大統領保安部隊から派遣された男達が投げ入れたもので、そのひとつは保安長官フアビアン・バーの投げたものだった。

マルコスはこの攻撃を共産主義テロリストのせいにし、身柄保護条例を停止し、多くの候補者を左翼であるとして留置場へ送った。

それは戒厳令への第一段階であり、事実その数カ月後の一九七二年九月、彼は戒厳令宣言を発している。大虐殺になるのを恐れロクサスはマニラを逃げ、十二ヶ月の間、身を隠していた。最終的に家に戻った一九七二年七月、自宅を監視していた二人の国家情報部に逮捕された。

ザンバルス地方の海軍基地へ連行され、牢の中へ監禁された。そこで地区司令官から金の仏像を発見した状況について質問を受けた。

彼はマルコスが戒厳令を宣言するまでの三ヶ月間収監されていた。パル将軍がこっそりとロクサスの監獄へ会いに来て、自分は金の仏像を押収しにロクサスの家へ行った強奪メンバーの一人だったと言った。

一九七三年一月、ロクサスは再びバグイオ裁判所へ連行され、銃不法

所持の罪で起訴された。有罪となった彼はバグイオ囚人収容所へ送られ、少なくとも二回目となる拷問を受け、再び金の埋めてある地下坑の場所を質問されることになった。

二年近く刑期を務め、釈放されて自宅へ帰った。その翌月、彼は復興支援事業所からきたという男性の訪問をうけ、バグイオ一般病院近くの財宝発掘の協力を求められた。

もちろん、ロクサスはこれを拒否した。ロクサスの協力を得られなくなったマルコスは、彼の穴掘り仲間の一人、オリンピオ・マグバラを拷問して得られる情報に頼ることにした。ペンチでマグバラの舌を一人一人がひっぱった。それは彼が地下坑の入り口がどこにあるかを話すまで続けられた。病院の裏の地面を調べ、閉ざされた地下坑の入り口をみつけるために部隊が派遣された。病院の看護婦や患者達は、彼らの搜索を見物するための観客席まで作っていた。

一九七四年のある日、病院のスタッフは兵士達が地面の穴の中からとても重そうな木箱を運び出すのを見た。彼らはトラックにそれを積み込んでいた。どの箱も四〜六人がかりだった。大統領保安部隊から派遣された兵士達に加えて、フィリピン軍事兵学校の生徒も参加していた。いくつかの箱は腐って壊れていたので箱から三個の金塊が地面に落ちた。それはタバコケースの大きさだった。(七五kgの金塊だ) 病院の職員の推定によると、一年以上にわたり毎日トラックへ十ケースは積み込んでいたという。すると概ね三六〇〇ケース、一〇八〇〇本の金塊(各七五kg)である。この間、護衛兵がそこらじゅうに配置され、誰も近づくことはできなかった。ロクサスは兵士達が地下坑をみつけ、彼が発見した金塊を盗んでいるのを知ったが、十分に訓練された兵士達には対抗することはできなかった。

一九七六年、彼は少なくとも暫くの間は運が悪かったとして家族とともに隠れ家へ引越し、十年ぐらいは何事もなかった。

一九八六年、フェルディナンドとイメルダ・マルコスは米政府により権力を奪われ、ハワイへ追放された時、ロクサスの存在が再び浮かび上がることになる。ロクサスが反撃できる時がやってくる。この話は第十五章で再開しよう。

ロクサスが拷問を受けている間、マルコス大統領はサンタ・ロマーナに彼の大量な金口座の幾らかを引き渡すように圧力をかけていた。彼らの関係はずいぶん昔へ遡ることになる。

家族の話によると、マルコスとサンティーが最初に手を組んだのは、マルコスが大統領になる前の一九六〇年代だった。サンティーはイメルダがミス・レイテだった時とても親密だったと話している。つまり始めは彼が自分の愛人ということでイメルダをフェルデナンドに紹介したのだった。当時ハンサムで力強いサンティーはイメルダの情夫だった。

背が高くスキンヘッドでたくましく、その頬骨が張った東洋的な顔立ちに伴優のユル・プリンナーそっくりだった。

我々が持っている写真の一枚を見ても、白いネール・スーツに白い靴を履き、他の人を見下すように背の高い自然な気品を感じさせる男だ。友人達は彼を「品行方正で、いい性格の男だった。」と述べている。彼のカリスマ性は彼が女性にも男性にも魅力的だったことで作られたのだ。サンティーはセベリノ・ガルシア・ディアズ・サンタ・ロマーナだけではなく、多くの名前を持っていた。(今は引退してカバナツアンに住んでいる彼の弟、ミグエル・マイク・サンタ・ロマーナ判事はサ

ンティーと顔が程遠いのだが、同じ家族の名前を使っている。

サンティーがエバングライン・キャンプトンと結婚した時に父の別名であるディアズを使った。しかし、一九三八年のジュリエッタ・フェルトとの結婚届ではサンタ・ロマーナにもどしてあった。

一九四〇年代後半に仕事上で使い始めた偽名は世界中の銀行証書に見受けられる。たとえば、ラーモン・ポーロツテ、ジョセ・アントニオ・ディアズ、ジョセ・アントニオ・セベリーノ・ディアス、J・アントニオ・ディアス、セベリーノ・ペナ・デ・ラ・パズ、マティアズ・コナーア、ジョセ・アルモンテ、サンティーなどなどだ。偽名を使うということは不法ではないが、どうしても怪しまれる。米国の法律では、偽名が詐欺に使われない限り不法行為とはみなされないことになっている。

作家、俳優などの偽名は、生活する上で合法的な役割がある。

日本の略奪物資回収の窓口としての彼は、CIAや財務省と仲間だった時、モナコで登記されたDNP・エンタープライズ（ディアズ・ナネイ・ポアロツテ）というトンネル会社を作り、その唯一の株主であり、支配者として偽名を使った。

彼は世界中の銀行口座に何十億と持つのだから、ひとつの会社では十分ではない。他にも、ナネットイ・エンタープライズ、コレット・エンタープライズ、モンティズマ・ディアズ・カンプトン・エンタープライズ、ポイロツテ・エンタープライズ、ディアズ・ポイロツテ・エンタープライズなどの会社がある。それらはマニラから世界の銀行へ金塊を移動する事を隠すために設立した中核会社だった。

サンティーはリヒテンシュタインに、最初サンタ・ロマーナ基金と呼ばれる基金を設立した。それは後日、サンティー基金、或いはサンテ

イー・アンタルトに組み込まれた。サンティーの旗艦、DNPエンタープライズのロゴマークは傘の骨組みを意味する開いた傘だった。しかしそれはロゴだけではなかった。アンブレラは、サンティーがフィリピンから世界へ金を移すためのグループに付けられた暗号名だ。

我々のCDには大統領マルコスが手書きで注釈を書いたフローチャートを再現しておいた。それを見れば、どのようにしてアンブレラが、一九七〇年代後半までにCIA諜報員、マフィア親分、フィリピン秘密警察、マルコスの殺し屋を混ぜ合わせた強力な組織に成長していったかが明らかになる。

アンブレラ組織の一員にアメリカの億万長者、法を超越しているウォーレン・グロブスがいる。グランド・バハマ島のオーナーであり、そこをナツソールのカジノはギャング団、マイヤー・ランスキーが運営していた。グランド・バハマの所有者の中でグロブスの仲間の一人は、パラマウント映画を支配し、ハーバード&チャーリー・アレンを経営するウォール街のアレン&COである。アレンはフィリピンに大きなベンゲット鉱山を所有し、ハーバートはマルコスとゴルフ友達だった。

アレンはかつて、「我々は毎日、売春婦や麻薬売人、いかさま師や囚人達と取引してたよ。それはアメリカ建国以来のやり方さ。」と言っていた。複雑なやり取りの中、グロブとアレンは、グランド・バハマの利権の一部をマルコス渡す見返りに、ベンゲットの支配をほぼ独占させるという取引をした。このことで、アンブレラが戦時略奪金塊をフィリピンから持ち出す時、ベンゲット鉱山産出の金に見せかける事ができる。

ある時、金塊がナツソールの一流銀行に着いた。これはグロブスの力

ジノを通じた麻薬代金洗浄などの役割の一部を担うもので、すぐに金の棒に取り替えられる。サンティーはその総額を知っており、一九七三年にその件を書いている。(一ヶ月に渡ったCIAとワシントンのエントナープライズへの訪問中に。)

それには「ベンゲット社とバハマ社との取引はとても大きなものだった。そしてX、Y、Zグループはあつという間に数百万ドルを生み出した。」とある。アンブレラはCIAに認められ、多くの銀行の金取引仲介を業務としていた。

ビル・キャセイやレイ・クラインのOSS CIA合同を実現させたポール・ヘリウエルは山下金塊の海外持ち出しに関わった第一世代だった。

一九五一年にヘリウエルは海上支援会社の設立を手助けした。早い話、黄金の三角地帯から国民党麻薬軍のヘロインやアヘンを運び出し、中国の国家主義者に供給するためだった。

ヘリウエルはナツソーで設立していたキャッスル銀行、マーカンティル銀行から身を引き、グローブスと親密になっていった。ヘリウエルのキャッスル銀行はCIA公認の非正規取引銀行のひとつで、独裁者や軍閥、反体制アジア軍将校の不法収益の資金洗浄を引き受けていた。キャッスル銀行はケイマン諸島のIDコーポレーションと密接な関係がある。IDの唯一のオーナーは日系米国人のシゲ・片山で、ロッキード社が日本の政治家に支払った莫大な賄賂事件の時の鍵をにぎる一人である。キャッスル銀行に悪い噂がでてきたので、ヌーガンハンド銀行と呼ばれるオーストラリア人の一人が潰し取って代わった。ところが、退役した米諜報員と国防省の役人がCIA長官と法律上の協議をすると称し、船に監禁して連れ去ってしまった。ヌーガン銀行が

ぶれ、幾人かが殺され、BCCIの構想が実現された。BCCIは最終的に一九九一年破綻し、CIAは長年にわたって隠れた作戦のための出費にBCCIを使ったことを認めた。

(注・BCCI the Bank of Credit and Commerce International
パキスタン系のイスラム銀行で、ルクセンブルグ籍)

一九七二年、貧民救済を目的に掲げ設立。以後70カ国以上の国々に進出し、国際的な業務を行ってきた。

一方で、フィリピンのマルコス大統領や、パナマのノリエガ將軍などの独裁者、ビン・ラディン一族などの不正蓄財の舞台となり、イスラム諸国の大量破壊兵器開発の資金源ともなり、さらにはCIAのアフガニスタン作戦での資金仲介などを行ったとされる。

一九九一年経営破綻し、総額100億ドル近い預金詐欺事件に発展。邦銀や日本企業にも多額の損害が発生した。

あまりにも多くの記録文書が隠されたままなので、我々はサンティーの果たした役割は、窓口で進行係、排気弁だったと憶測するべきだ。謎の億万長者として楽しんで来たサンティーにあまりにも財政的ならくりをまかせすぎたため、CIAに拒否権が必要だった。

黒い金(Black Gold)がフィリピンから香港、チューリップ、ブエノスアイレス、或いはロンドンに移さなければならなかった時期は、我々が持つ航空便送り状、貨物送り状、損害保証金などの書類からわかる。それらは、闇の金がクラーク基地から空軍機で、スービック湾から海軍船で、フィリピン国際空港からキャセイ航空で、港湾から米大統領航路により商船で、というふうには運ばれたことを表している。

アンブレラは金塊の行き先は勿論だが、機密を守ることに注意した。戦後、サンティーの大量の闇金がバチカンなどのイタリアの銀行へ投入されると、イタリアの共産党が権力を持たないように努力していたCIAに代りマフィアがそれに関わることになるのは承知のことであった。毎回、サンティー或いはサンティーの偽名の一つを口座名に使い新規口座を開設していた。あまりにも多くの偽名を使っていたため、たまに「名無し男」と見られたこともあった。

これらの口座にアクセスするには、毎回、通常の銀行コード、パスワード、証書の束、サンティー自身の口座番号、ランスデイルから教わった合言葉が求められた。表面的にはサンティーがその口座の名義人であったが、その財産や派生的な取引は連邦準備銀行や英国銀行、日本銀行、スイス銀行の合意している秘密の目印を取り決め、諸政府に使われていたことがはっきりしている。

決して明らかにはされないが、サンティーは口座の窓口としての見返りに、口座金額に応じた相応な歩合、かなりの営業報酬を受け取っていた。一年に十億ドルの1%を報酬とただだけで一千万ドルを生み出す。最低で1%と考えても百万ドルだ。そしてその口座は何ダースもあったのだ。一九七〇年代まで口座はサンティーと密接に結びついてきた。そして幾つかの情報源は彼の物だと考えていた。控えめに見積もっても合計額は五百億ドルをゆうに超えていた。(六兆円??)もしそれが彼の個人財産ならば、世界の富豪の一人になるだろう。しかし決して国際的な富裕層になることはなかった。

私は、彼が死ぬ前年にCIAの要人としてワシントンを訪れたことを、そして死に至るまでCIAに雇われ続けていたことを知っている。彼はマニラとキャバナツアンに広大な家を持ち、マニラのヒルトンにも

部屋を持つという優雅な暮らしをしていた。しかし、自家用ジェットもフェラーリも買うことはなかった。

彼は、銀行業界とスパイの間を除くとフィリピン外部では知られていなかったし、マニラですら社会的に目立つこともなかった。今まで誰もマニラの不思議な億万長者の物語を書いた者はいない。彼の仕事は冷戦構造の中ですべて入り組んだ秘密の歯車のひとつだったただだ。

CIA或いは米財務省の文書を参考にせずに銀行の内部文書が関わっている彼らの関係を拾い出してみると、どうしてサンティーが口座の名義人の地位にいたかを分析することは重要であろう。しかし、明らかに彼は名義人だったのだから。

フィリピン内部で起こったことを把握することは容易だ。サンティーの金の一部は、マルコスが大統領選で勝つための助けになっていた。マルコスはその地位を得るため二十年間出費を続け、ついに一九六五年、実を結んだ。そのやり方は自著「マルコス王朝」に詳しく述べているが、彼はインドシナでの戦争が拡大する間にCIAと米国防省のお気に入りになっていた。

マルコスが大統領になる前から、彼の選挙対策チームはランスデイルのために働いていた。マルコスは宮殿に入る時、新しいマグサイサイ、つまり、親米家として送り込まれたのだった。マルコスはハワイトハウスに対して、彼が香港、東京、台北、シンガポール、シドニーの銀行にあるサンティーの預金を賄賂として注ぎ込めば、東南アジアの指導者にベトナム戦争への協力が得られる様にできると説いて回った。それらの現金での賄賂は一晚で浪費される程度のもだったが、金引換証書などの派生商品の形式でその持ち主には莫大な預金の金利が手に入るものがあつた。受取人として振舞っている間は、利息を引

き出し続けることができた。しかし、仮に彼のことが気に入らな
なれば、その証書は偽者と宣告されるのだ。ちょうど、自民党が「五
七年債」を偽造品と言ったようにだ。

マルコスが大統領だったとき、彼はインドシナにおけるアメリカの戦
争を支持していたが、それは自由のためではなく、自分がマラカニ
アンに居続けられるように、アメリカと公共投資で取引をしたのだっ
た。

一九八六年、レーガン大統領によって倒されるまで、彼はホワイトハ
ウスのお気に入りだった。第一期の四年が終わる頃、彼の評判は散々
だった。イメルダが週末のショッピングで百万単位の浪費をして、非
難が沸き起こった。一九六八年に彼女と娘のアイミーはニューヨーク
の週末ショッピングで三百三十万ドルを散財した。そしてまた、税務
署の記録から、イメルダが大量の預金をしたマンハッタンのシテイバ
ンクにはサンティーも大量の現金と金の貯蓄口座を持っていたことが
明らかになっている。ある噂（後日、本当だと証明されたが・・）マ
ルコスの給与自体は最低水準だったのに、海外の預金口座には数十億
ドルが塩漬けになっていた。多くの批判にもかかわらず、一九六九年、
マルコスは不正投票のおかげでもう一期その地位を勤めることになっ
た。フィリピン憲法では三選は禁止されていた。憲法の改正に失敗し
たマルコスと防衛大臣は、一九七二年、政権に残るためには戒厳令を
適用することが必要になり、共産主義の反乱をでっちあげた。その八
イライトは手榴弾によるミランダプラザの攻撃で、反対勢力へのテロ
攻撃とロジャー・ロクサスを黙らせることだった。格別する賢かった
事は、マルコスらがサンティーにアンブレラの副長官と名づけさせた
ことだ。二十五年間も次から次へと同じ事をして疲れきったサンテ

ィは酒に溺れていった。マルコスの制御ができなくなり、憂鬱になっ
ていった。

マルコスのお気に入りになり褒美にありつくのはCIA高官のトップ
に成り上がる新しく気まぐれな性格の奴ばかりで、中国で暴れ回った
り、汚い策略を使って冷戦の兵士として活躍したOSSでの昔の記憶
などを共有しない連中だった。古い護衛兵達は彼を直接知っていたし、
評価もしていた。マルコスはCIAの連中がサンティーの預金に気付
かず数年間もそのままになっているのを知った。彼はサンティーにそ
の休眠預金を譲渡させようと考えた。

マルコスはサンティー基金には格別に執着した。マラカニアン宮殿で
は、肉体的な暴力は日常茶飯事だ。宮殿の一角にある「黒い部屋」で
殺人や拷問がなされていた事は広く知られていた。大統領と対立した
者はすべて酷い姿で暗殺された。目玉はくりぬかれ、バツ印のサイン
を付けられ死骸は路上に放置された。サンティーは急いで自分自身を
守り、なおかつ、個人預金を大統領により押収されない手段を考え始
めた。

彼が協力を求めた者はタルシアナ・ロドリゲスという名のフィリピン
人だった。彼女を彼が持つすべての会社の正式な財産所有者とし、何
十億ドルという現金、金の延べ棒、金引換書、世界中にある貯蔵品や
財産の信託者とした。フィリピン裁判所へ提出された宣誓証書には、
タルシアナが一九七一年八月にサンティーに初めて会った時のいきさ
つが説明してある。従姉妹のルツ・ランバーノ（サンティーの死ぬま
での最後三年間の愛人）に紹介された時、彼女は小さな会計会社で秘
書をしていた。事実上、ルツは彼と結婚していたのだが、カソリック
であるフィリピンでは離婚は許されないから、正式にはジュリエッ

タ・フェルトが彼と結婚していたことになる。

ルツはサンテューに信頼できる会計係と帳簿係が必要だと思い、タルシアナの事務所へ連れていった。後日、タルシアナはヒルトンの彼の部屋へ主任会計士として訪問した時、彼が世界の金融界での重要な人物だと知った。「私は彼が重要人物だとすぐわかったわ。七十年代に普通のフィリピン人が五つ星ホテルに部屋をとっているなんて、とてもすごいことなんですもの。彼の部屋に行くと、銀行家、仲介人、仕事仲間とか、そりゃあいろんな人が次から次へと訪ねて来るのでびっくりしたわ。世界中の力のある銀行家の中で彼は有名人だったのよ。」その時以降、タルシアナはサンテューの中核会社の雑用兼会計係をすることになった。

彼女は決して馬鹿な質問をしなかったが、彼の病的な癖には困っていた。ヒルトンに年間契約で住むようなゆとりがあるくせに、マグサイサイビルの子EIA事務所から道路を渡ってくる時、彼はどうしてもあんなツギハギだらけの服を着ているんだらう？

彼女はツギあては穴を補修しているものではないと知った。彼は狂ったフィリピンの与太者を装って、出入りする人々を監視していたのだ。

マルコスがロクサスから金の仏像を盗み、彼を布切れのように打ち据えた後、サンテューはルツ・ランバーノと一緒にファースト・ナショナル・シティ・バンクのマニラ支店へ行き口座を開設した。(現在のシティ・バンク)

彼女の宣誓供述によると、「四千三百万ドルの現金を銀行家ジェームズ・J・コーリン同席のもとで預金したのよ。小さな紙幣ばかりだったから、職員は六日もかかって数えたそうよ。」

めったにおこらないことだが、銀行員は忘れたのだらう。後になり、ルツが弁護士メル・ペリーを雇ってサンテューを訴え、金を取り戻そうとしたら、「コーリンはニューヨークへ宣誓証書を提出してたのよ。でもそれにはその口座の開設に関わったことを否定してたのよ、それどころかその取引自体までも否定して、一九七一年にセベリーノ・サンタ・ロマーナが銀行にやってきて、何かの事業を始めるのに少しばかりのお金を借りたいと話していった事を思い出したって言うのよ。」サンテューは四千三百万ドルもお金を持っているのに小さな勘定はないだらう。

偽のボロを着身にまとった風変わりな金持ちサンテューはフィリピン中の家や事務所の壁の中の秘密金庫に金を貯めこんでいたにちがいない。それらは日本軍が東南アジアで没収した通貨で東京へ返却されなかったものだったのだらう。マルコスを恐れたサンテューとルツは洗濯袋に金を詰め込み、シティ・バンクへ持っていった。そこが安全だと思っていたとしたら、とんでもない間違いだった。

ルツの話によると、サンテューはそこで九個の貸金庫を借り、現金と宝石で中をいっぱいにしたという。マルコス一族の話では、軍事裁判の直前、サンテューはファースト・ナショナル・シティ・バンクのマニラ支店からニューヨークのシティ・バンクへ預金を動かし、八億ドルをフィリピンから海外へ振替えたそうである。しかし、彼はそんなにすぐにしたわけではない。一九七三年二月二七日、サンテューは大統領個人事務室のあるマラカニアン宮殿に出頭させられ、マルコスにタイプで書かれた「遺言書」に署名をさせられた。この書面には、サンテューが「自分の資産、不動産、動産、他国の通貨、財宝、貸金庫の安全と貯蔵のための個人的な理由でいろいろな名前えを使用して

いる」とあった。さらに続けて、「私はマニラ、香港、カリフォルニア、ニューヨーク、アルゼンチン、シンガポール、台湾、ドイツ、オーストラリア、ほかのいろいろなアジアの国々の貸金庫に多くの資産を保有している。」

遺言書には「私の妻、ジュリエッタ・フェルトを上記のすべての財産の後継者とし、私が死にいたった場合、全権力と権威のもとに裁判所の検認に従い、私の管財人を執行するための第三者を指名するであろう。」と銘記されていた。遺言書にサンティーが署名し、立会人は仕事仲間のジョーズ・T・ベラスケス、そしてマルコスの従僕、ジル・デ・グツマンと大統領秘書ビクタ・G・ニチューダだった。

正式にジュリエッタ・フェルトを唯一の法定相続人にするものだったが、彼が死ぬとマルコスが容易に財産の管財人を指名できることになっていた。そうなればマルコスがサンティーの預金を支配できることになる。

数カ月後の一九七三年三月、他にも精神的な攻撃を受け、マニラから香港の香港上海銀行へ五億ドル移した。この合計、つまりニューヨークのシティバンクへ振り替えた八億ドルを加えると、彼はマニラの外へ現金で十三億ドル移し終えていた。同じ期間、彼は後日、日本の三和銀行に乗っ取られてしまうことになる一六四〇トンの金塊を香港銀行へ移送した。それからすぐ、レイテ島のタクロパンへの旅行中、ルツとサンティーは逮捕への恐怖からなのか、飲みすぎで大騒ぎをってしまった。戒厳令の中、マルコスは誰でも逮捕することができる。タルシアナはサンティーからキャンプ・パンパスの軍事基地に留置されていると長距離電話で告げられた。彼はタルシアナに「噂話で」逮捕されたと言った。(マルコスが裏で噂を流していたのだ!) できる限

り早くレイテに来てほしいとタルシアナに叫んだ。タルシアナがやってきたので、彼はシティバンクの支店長代理へ私信を運ぶように話し、貸金庫の鍵を渡した。ひとつの貸金庫には他の八つの貸金庫の鍵が入っていた。二番目の金庫にはタルシアナが貸金庫の支払いをするための現金が、三番目には彼女に持ってきてほしい宝石類が入っている。タルシアナが手紙と鍵を持ってシティバンクへ行くと、コーリンは出国していつ戻るか分からないと聞かされた。

何年にも渡ってサンティーはCIAやランスデイル將軍に格別に保護されてきた。しかし一九七三年、諜報部は大混乱に陥った。高官の多くは、「首になるか、左遷されるなんて馬鹿馬鹿しい。」と辞職していった。彼らの関心は、自分達の秘密組織が影のCIAを設立する事に集中した。CIAはよく「ザ・カンパニー」と呼ばれていたから、新しく作った影のCIAは「エンタープライズ」とでも呼ばれていたのだろう。(あとの章でもっと詳しく説明しよう。そして不思議な成り行きも・・・)

この混乱の中、サンティーはランスデイル、ヘリウエル、クラインなどと共に昔なじみとしてワシントンに招かれた。

一ヶ月以上にわたり、彼らはサンティーと昔のOSSの話、例えばマオとの戦い、台湾脱出の話、どの様にしてCAT(クレイル・ケンナウルト・市民航空)をエアー・アメリカに変えたのか、或いはラテン・アメリカやアフリカ、そして鉄のカーテンの裏で行った数々の秘密作戦を説明し、大いに盛り上がっていた。彼はメイフラワー・ホテルへ帰ると、毎晩グラスを片手に椅子に座り、知りえた事を日記に書いていた。ところどころ日付や綴りが間違っているあわれな文章は、タルシアナに言わせるとウイスキーのせいだった。その日記の中には数年後

によろやくアメリカ市民が知るようになる数多くのCIA秘密工作の内容が説明してあった。例えばどうしてCIAが自らDNPエンタープライズの様なものを所有したのか。アンゴラなど、極秘の戦争支援のためにどのぐらいの会社が、航空、海運、軍事物資の供給、傭兵などで存在したのか・・など。人々は、「沈黙を守るために年金を払うのだ。」と彼は言う。そして道徳的なジレンマを多くの諜報員の作戦で感じていたと述べている。

「事件に対する倫理観があったかどうか疑問だし、戦時法はCIAには適用されないからね。」費用も法的な許可なしに使われ、諜報員への資金援助は彼らの好きにまかせた。

サンティーは神経質になっていたようで、「ラングレー本部は時々、財産は確かに増えていると曖昧にほめかしたただけだ。」とある。日記の最後のあたりには、「CIAとニクソン政権はアジア全体をだらしないう所と確信しており、長期間の米国介入を正当化したと書いています。」

「強調したいのは、第三世界であるアジア独占企業の内部事情にあからさまなアメリカの干渉が継続していたことだ。」

さて、昔のサンティーの保護者が望んでいた物とは、今や彼らは自分達の私設CIAや私設の軍隊を設立している時であり、ワシントンが失っていた闇の金塊のいくらかを手に入れたかったのだ。

彼らはサンティーが大変な金額の個人預金を眠ったまま所有していることを知っていて、それを自由にしたかったのだ。

マルコス、CIA、新しい影のCIAの強い圧力に対し、サンティーは自分自身と財産を守るために次の段階へ進まねばならなかった。

彼はフィリピンへ引き返し、よく考えた後の一九七四年八月一日、タルシアナへ電話を入れ、カバイト市へ会いにくるように求めた。彼女

がやってきた時彼は、彼女に「すべての基金と有価証券、社債の管理と責任」を持ってもらうため、DNPエンタープライズの国内会計士として彼女を正式かつ公式に指名する書類を渡し、彼の旧友であり同僚のDNPエンタープライズ社長、ジョセ・T・バラスクイーズ・JRの助言をもとに、預金も企業への融資もその名前でを行うことにした。彼は又、ウェールズ・ファーゴ銀行とハノーバー銀行にあるサンティーの口座をどうするかを指示した。彼女は、どうしてもとふさわしい人を選ばないのかをたずねた。彼は「信頼できるのは君しかいないよ。」と言った。

サンティーは善悪の区別を失いつつあったマニラ虐殺の後の苦しかった時期、小島大佐を拷問してから三十年がすぎていた。

ゴールデン・リリーの地下金庫からの回収作業は一九四七年で終わり、彼はその歩合から大きな収入を享受し始めた。質素な生活を好んだので、彼の財産は今までに比べとんでもないものに成長していた。心優しい男の彼は、年がたつほど陽気になっていった。

しかし、マルコスの裏切りと残酷さは彼にショックを与えた。それから、ワシントンでは、暗殺、誘拐、残虐事件、人間性を問われるような大きな詐欺などの話で彼を楽しませた人物と対決させられた。彼らにとつて第二次大戦は終わっていない。彼は初めて自分が悪漢や暗殺団の雇い主であったと思い始め、それが彼を憂鬱な気分させていた。

安全対策のため、タルシアナ、ルツ、ベラスクイーズの三人が預金をおろせるための口座として、香港銀行マニラ支店(後に香港中央支店)の口座開設届けの署名見本用紙に署名させた。彼はルツとタルシアナに彼のすべての偽名、会社、登記場所、彼の口座がある銀行すべてを記憶するように命じた。各銀行の口座番号、コードとキーワード、そ

してその預金の引き出しに必要なすべての事務手続きを一覧表にして渡した。彼はいつそう深酒となり、肝臓は悪化した。八月後半、タルシアナは彼が「不安気で心配そうで・・・とても具合悪く、息も絶え絶えだ」と気づいた。一九七四年九月十三日、彼は倒れ、パセイ市のサン・ジュアン・デ・ディオス病院へ収容された。

彼はベッド脇にいるタルシアナへ貸金庫を開ける時がきたと言った。彼は彼女に信託証書の保証約款を渡し、識別表と多くの説明書、彼の人生の「発掘と冒険」の話を書いたメモを渡した。

九月二十一日、彼は病院で新しく四ページの遺言書を書き上げた。「私は時間がほしい。どんなにつじつまが合わなくてもこの遺言が日の目を見るようにしてほしい。」彼はマルコスに強制されて署名したマラカニアン宮殿の遺書の内容に言及した。この新しい遺言で彼は、使用中である莫大な香港銀行の香港本店と、他にシテイバンク・マニラ支店の預金口座を挙げた。彼は銀行預金の受取人として全部で十四人の名前を出した。シテイバンク・マニラ支店の銀行預金通帳から六千五百万ドル以上の配分を決定した。香港・上海銀行香港支店からは、二千万ドル以上と別に八百万ドルの配分を決めた。他に香港・上海銀行の一億二千万ドルはレイテの人々と、言い忘れた人達のためにとっておいた。又、サン・ジュアン市のシテイ・バンクにある個人口座から五千万ドルと、別の一千万ペソを配分した。受取人の中には最初の結婚での二人の息子、ピーターとロイ・ディアス、スペイン名でペドロとロランドが含まれていた。(この自筆の遺言書はフィリピンと米国の裁判以前に検認されていただろう。そしてCDに載せてある。)

病院で十二日が過ぎ、彼の娘フロレデリッサ・タントコ・サンタ・ロマーナ(よくリザ・タンと呼ばれている)は父の看護から解放された。

サンティーは病院を出ることを恐れたが、リザは彼が自宅で死ぬ事を望んだ。

彼女が自宅のあるカバナツアン市へ連れていった数日後、彼はベッドの上で死んだ。肝硬変だった。

マルコス一族に精通している情報筋によると、ランスデイル少佐はすぐにシテイ・バンクのマニラ支店に残っているサンティーの金の延べ棒すべてをニューヨークにあるシテイ・バンク本店へ移すように手配したという。もし彼がサンティーの名前による法廷弁護人の委任状を利用したのでないなら、それを実行できた説明は困難だろう。動機のひとつは、たぶんマルコスが没収する前にゴールドをマニラの外へ持ち出したかったことだろう。又、別の魔法の杖をふるうことで、別の銀行にある大きな預金、特にその中で特筆すべきは二万トンの金塊が収められていると言われ、名義人の記録にサンティーが載っている口座がランスデイル名義に書き替えられていた。(UBSの証書にはあきらかに合意のもとわざと Landsdale と綴られていた。)

ランスデイルはその預金をより巨大な CIA、或いはジョンバーチ協会とか世界反共連盟などの保守陣営の権力者とエンタープライズ社の支配に委ねたのだろうか？その回答はあとで確かめよう。

仮にマルコスがサンティーの死で預金すべての支配をマルコスの与えられると考えていたとすればがっかりであろう。マルコスと CIA やホワイトハウスとの関係は険悪になっていった。

マルコスはその預金に関わることができると考えていた。CIAとホワイトハウスは彼を操ることができると考えた。彼らはどちらも正しかった。回収する財宝がある限りサンティーの休眠口座はそのままにされていただろう。